

# 仏様のおはなし新シリーズ第123集「コロナ禍の生死」

二〇二一年の春、本願寺国際センターの公開講座がオンラインで開催され、徳永一道先生が「コロナ禍の浄土真宗」というテーマで講演されました。国際センターとは、浄土真宗のみ教えを世界に発信するという大事な役割を担っている機関です。親鸞聖人のご著作を全て英語に翻訳するという大事業を、約五十年かけて数年前に完成されました。徳永先生は長年に亘つてその中心におられた方です。

英語圏には無い仏教用語を翻訳するわけですから様々なる苦労があつたと思われます。一例としてこんな話をされました。「生死(しょうじ)とは仏教の基本的な言葉ですが、これを意味する言葉は、英語にはありません。それを Born and die と訳したなら生と死を別ものと分けてしまうので間違つてしまします。いろいろ話し合つた挙句、Born と die を一(ハイフン)でつないで生死の英訳としました。おご苦労の一端です。そのうえで徳永先生は、「この不自由なコロナ禍にあつて、人が死を身近に感じているとすればそれは幸いなことですね」と、生死の身であることを忘れて生活している私たちを戒められました。更に「生死という言葉を知つてゐる皆さんも、やはり死を生が終わつた先だと考えているでしよう。そうではありません、死はいま生きている私たちの背中に貼り付いています。紙の表と裏のようなもので」と、だめ押しながらいました。

確かに新型コロナウイルスの蔓延によつて、死を身近に感じるとともに、人間も自然界のなかの存在であつたことに改めて気づいて、少しほは謙虚になれたことは幸いではなかつたでしようか。

その生死を、いつを始めとするかわからぬほどに繰り返してきた無始流转(むしるてん)の私に、「もう十分に苦しみ迷つてきたお前が、また同じことを繰り返そうとしているのを私は放つておけないのだよ。必ず浄土に迎えとる、我に任せよ。南無阿弥陀仏。」と呼びどおしに呼んでくださつてゐるのが阿弥陀さまなのです。今生を迷いの最後として、ついに生死を離れる身とならせていただいたことを喜び、同時に過去の罪の歩みに気づかせていただいたこと。これこそが人間に生まれた意味だったのだと味わいます。



福岡組 検索